

# イギリス・ロマン主義における“German Tragedies” の翻訳：コツェブーの『ペルーのスペイン人』

市川 純

## 序

The invaluable works of our elder writers, I had almost said the works of Shakespeare and Milton, are driven into neglect by frantic novels, sickly and stupid German Tragedies, and deluges of idle and extravagant stories in verse. (Wordsworth, *Lyrical Ballads*, “Preface to the Second Edition” 746-47)

ワーズワス (William Wordsworth) が『叙情民謡集』 (*Lyrical Ballads*) 第二版 (1800) に寄せた序文の中で、「狂った小説」 (frantic novels) と共に、「気分の悪い馬鹿げたドイツの悲劇」 (sickly and stupid German Tragedies) を激しく非難し、これらがシェイクスピアやミルトンのような偉大な先人を追いやっている現状を告発していることはよく知られている。だが、ここで「狂った小説」と並べられている「ドイツの悲劇」とは実際どのような作品なのだろうか。

これまで序文の注釈者は「ドイツの悲劇」に説明を加え、たとえばダンカン・ウー (Duncan Wu) は「狂った小説」と合わせて次のような注を付けている。“Gothic novels, and plays by sentimental writers like Kotzebue, were popular at this time.” (359, note 35) この当時、ゴシック小説が低俗なジャンルと見なされていたことは既に有名であり、その不道徳性や過剰に感受性を刺激する内容が一般的には非難的となっていた。では、ここでゴシック小説と並べて非難されている悲劇を著したコツェブー (August von Kotzebue) とはどのような作家なのか。当時人気を博してい

たと言われているが、今日その名前を聞くことは英文学のみならずドイツ文学界においても少ないようであり、ワーズワスが何を念頭においてこの序文を書いていたのか、今では具体的イメージを浮かべることが難しくなっている。

本論の目的は、まずこの時代にコツェブーが多大な人気を博していたにも関わらず、現代の研究で言及されることが極めて少なくなってしまう原因を、批評史を概観することで明らかにする。次いで、ワーズワスが上の序文で非難しているドイツの悲劇、特にコツェブーの作品は実際どのようなものなのかを検証する。これにより、今日葬り去られてしまった作家を掘り返し、それによってロマン主義時代の詩人が何を批判して自らの信念を貫こうとしていたのか、新たな視点を提示したい。

## 1. イギリスにおけるドイツ悲劇翻訳の研究史概説

引用した序文にも見られるが、ゴシック小説とドイツの悲劇は文学的な価値を認められずに批判的に扱われることが多く、またどちらも内容的に共通するところがあった。つまり、両者ともイギリスではない異国を舞台にし、恐怖や悲劇的色彩が読者や観客の感受性を強く刺激する。

ただし、ドイツでは文芸ジャンルとしてゴシックという名称は無く、いわゆるゴシック小説やゴシック演劇と呼ばれるものは無かった。だがそれに類するジャンルがあり、それが「恐怖小説」(Schauerroman)と呼ばれるものである。また、ゲーテ (Johann Wolfgang von Goethe) の『鉄の手のゲッツ・フォン・ベルリヒンゲン』(*Götz von Berlichingen mit der eisernen Hand* 1773) のような文字通り騎士が活躍する「騎士小説」(Ritterroman) や、シラー (Johann Christoph Friedrich Schiller) の『群盗』(*Die Räuber* 1781) のように、盗賊の活動を描く「盗賊小説」(Räuberroman) という名称もある。ただし、これらの名称に関して亀井伸治はいずれも恐怖を物語効果として含むものであるため、この二つを「恐怖小説」の下位範疇として捉えており (6)、本論もその分類法に基づいて考察する。

これら三つの名称には「小説」(Roman) の語が使われているが、『ゲッツ・フォン・ベルリヒンゲン』や『群盗』がそうであるように、劇作

品がその成立に寄与している。元は劇であっても、内容、舞台設定の上で類似の小説がいくつも生まれるようになり、これらの用語が成立する。本論考で考察するのは主としてコツェブーの悲劇であり、小説ではないが、ドイツの恐怖小説の系譜に隣接した作品であるといえる。

ドイツの恐怖小説はイギリスにおけるゴシック小説に近い内容を持つが、英文学研究において長らくゴシック小説の評価が低いままであったのと同じく、ドイツ文学界においても恐怖小説の地位は低く、論じられる機会も少なかった。このことはワーズワスが言及した「ドイツの悲劇」が何を指すのか、いまだに漠然としたイメージさえ湧きづらい現状にも関係してくるように思われる。

なぜ、ドイツにおける恐怖小説の研究は進まなかったのか。石川實は「十九世紀半ば第二帝国の編成が進むにつれて、恐怖小説は、単に芸術的価値の低い文学として軽視されるに留らず、激しく嫌悪され、忌避されるようになり、文学史から抹殺され、特に「国民文学」と結びつけて論ずることはタブーとなってしまった」ことを大きな理由とし、その状況が第二次大戦後まで続いていると述べている(212)。長い間芸術性を認められなかったのはイギリスのゴシック小説と共通するが、ドイツではさらにその後の政治的状況が関係していると見られている。そして、ドイツ文学研究におけるコツェブーの評価が低ければ、それだけ英文学研究においても参照できる資料や機会が失われる。それが、イギリス・ロマン主義文学においてコツェブーの存在意義がほとんど論じられていない現状と繋がっているのではないだろうか。

ただし、この状況は最近改善の兆しが見られている。2009年に、亀井伸治による『ドイツのゴシック小説』が刊行され、恐怖小説がいかに豊かに花開き、またイギリスのゴシック小説とどのような関係を持っていたか、詳しく論じられるようになった。ただし、問題は本論で取り上げるコツェブーについて極めて限定的な言及しかないのである。

英語文献においては、ゴシック批評の古典ともいえるべきエイノ・レイロウ(Eino Railo)の『取り付かれた城』(*The Haunted Castle* 1927)や、モンタギュー・サマーズ(Montague Summers)の『ゴシック探求』(*The Gothic Quest* 1938)といった包括的研究書が、早くもコツェブーの劇の

翻訳について言及している。また、コツェブーに限らず、18 世紀後半から 19 世紀初めまでのイギリスにおけるドイツ文学の受容を包括的に考察したものとして、V・ストックリー(V. Stockley)の『1750 年から 1830 年のイングランドにおいて知られていたドイツ文学』(*German Literature as Known in England 1750-1830* 1929)がある。ここに挙げられるのはいずれも古い文献ばかりだが、その理由は、最近に至るまでこの分野の研究があまり発展せず、目立った著作が生まれなかったためである。

英米の研究書では、ようやく最近になってジェイムズ・ワット (James Watt) の『ゴシック論争』(*Contesting the Gothic: Fiction, Genre and Cultural Conflict, 1764-1832* 1999) やマイケル・ゲイマー (Michael Gamer) の『ロマン主義とゴシック』(*Romanticism and the Gothic: Genre, Reception, and Canon Formation* 2000) といった成果が出て、これらが詳しく時代状況の考察と合わせてドイツのゴシックや悲劇について論じている。そして、コツェブーへの言及は少ないものの、「ケンブリッジ・コンパニオン」シリーズの「ゴシック・フィクション」の巻 (*The Cambridge Companion to Gothic Fiction* 2002) は独仏のゴシックを独立した一章の中で扱っている。

このように、1920 年代から 30 年代にかけて一度盛り上がりを見せたドイツのゴシック、或いは悲劇の研究であったが、その後、比較的最近に至るまであまり目立った発展はしなかった。現代になってようやく見直される機運となり、本研究もその流れを加速させることを意図している。それは、このドイツの悲劇を研究、理解することが、イギリス・ロマン主義詩人の意識を探る上でも重要だからである。

## 2. ロマン主義時代におけるコツェブーの人気

ワーズワスが「ドイツの悲劇」の名を挙げて批判したのは、それだけこのジャンルが多大な人気を誇っていたからであるが、では、どの程度ドイツの悲劇、特にコツェブーの作品は人気があったのか。

コツェブーは 1761 年にワイマルに生まれ、1819 年に亡くなるが、この間ヨーロッパ各地を回り、その作品の人気はドイツ国内に留まらず、ロンドンの劇場においても好評だった。18 世紀の終わりというと、ゲ

イギリス・ロマン主義における“German Tragedies”の翻訳: コツェブーの『ペルーのスペイン人』

ーテやシラーが活躍していた時代であるが、イギリスの大衆におけるコツェブーの人気は彼らをしのぐものであったといえる。

1799年の『クリティカル・レビュー』誌に掲載された、彼の悲劇『ウルフィンゲンのアデレード』(*Adelaide of Wulfingen* 1798 英訳 [原題 *Adelheid von Wulfingen* 1798])の書評には、二人の偉大なるドイツ文人と比較した以下のような表現が見られる。

Of all the German dramatists, Kotzebue has obtained the most rapid, and perhaps the most permanent, celebrity in England. More true to nature than Schiller, if he astonish us less, he delights us more; inferior to Goethe in correctness of taste, he appeals with more effect to the feelings. (31)

作品の完成度においてあらゆる点で両文人に匹敵するわけではないが、コツェブーを「シラーよりも自然に忠実」で、「ゲーテよりも感覚に訴える効果がある」として評価している。今日のシラー、ゲーテの評価とそれに対するコツェブーの知名度の低さを考えると、当時のコツェブー人気と評価の高さは我々の想像を大きく超えるものである。なお、この時代の主だった定期刊行物を調査したところ、特に『クリティカル・レビュー』誌はコツェブーの作品を積極的に評価、紹介しており、1798年から1801年の間に盛んに紹介記事が見られる。

上演回数に関してはゲイマーによると、ドゥルルーリー・レーン (Drury Lane) とコヴェント・ガーデン (Covent Garden) における1798年10月11日から1800年2月7日までの間の300晩では、240公演がコツェブー原作の作品だったという。これは恐らくこの期間において二つの劇場のうちどちらかはコツェブー作品を上演しており、シェイクスピア作品の6倍の割合となるらしい(149)。すなわち、ワーズワスの序文にあるシェイクスピアさえドイツの悲劇などに追いやられて無視されているという指摘は、あながち誇張ではないと言えるのだ。

大衆に圧倒的な人気を誇っていたコツェブーであるが、ワーズワスの批判にもあるように、批評的言説においては決して高く評価されていたわけではない。この時代のイギリスでドイツ文学の受容に貢献した人物

の一人にコウルリッジ (Samuel Taylor Coleridge) がいるが、ゲーテやシラーの翻訳もこなしたコウルリッジもコツェブーに関しては辛辣な言葉を残している。それは『講演』 (Lectures 1808-1819) や『文学的自叙伝』 (Biographia Literaria 1817) 等に散見されるが、ここでは幾つか重要と思われる箇所を引用し、彼の考えを検証してみる。

シェイクスピアを評価するコウルリッジにとって、人々がコツェブーの作品に夢中になっている状況は腹立たしかったようで、コツェブーの名は否定的な意味合いで随所に登場する。その批判の理由は 1813 年のシェイクスピアに関する講義の 5 回目で以下のように示されたようである。

Of the assertion of Dr. Johnson, that the writings of Shakespear [sic] were deficient in pathos, and that he only put our senses into complete peacefulness, Mr. Coleridge held this much preferable to that degree of excitement, which was the object of the German drama; . . . A distortion of feeling was the feature of the modern drama of Kotsubue [sic], and his followers; its heroes were generous, liberal, brave, and noble, just so far as they could, without the sacrifice of one christian virtue—its misanthropes were tender-hearted, and its tender-hearted were misanthropes. (568)

先に引用した『クリティカル・レビュー』の評者はコツェブーがシラーよりも自然だと書いていた。だが、コウルリッジはそう考えていない。また、ゲーテよりも感覚 (feeling) に訴えるところが大きいという評に関しても、まさにその感覚が歪むほどの過剰さを問題としている。

自然という問題については『文学的自叙伝』の中でフランス演劇について述べている箇所に登場する。この点について彼はフランスの悲劇を限定的に評価する一方、やはり悪例としてコツェブーの名を挙げる。

But however meanly I may think of the French serious drama, even in its most perfect specimens; and with whatever right I may complain of its perpetual falsification of the language, and of the connections and

transitions of thought, which Nature has appropriated to states of passion; still, however, the French tragedies are consistent works of art, and the offspring of great intellectual power. Preserving a fitness in the parts, and a harmony in the whole, they form a nature of their own, though a false nature. Still they excite the minds of the spectators to active thought, to a striving after ideal excellence. The soul is not stupefied into mere sensations, by a worthless sympathy with our own ordinary sufferings, or an empty curiosity for the surprising, undignified by the language or the situations which awe and delight the imagination. What (I would ask of the crowd, that press forward to the pantomimic tragedies and weeping comedies of Kotzebue and his imitators) what are you seeking? Is it comedy? (184-85)

コウルリッジにとってコツェブーの演劇は極めて不自然であり、極端に感情を高ぶらせた結果、悲劇が喜劇になるとまで主張している。当時の多くの観客は、この演劇に大いに魅力を感じ、感情も強く揺さぶられたであろうが、コウルリッジはそのような態度でこの作品を味わうことはできなかった。当時の熱狂的な大衆に対し、コウルリッジが極めて冷静な審美眼を持っていたことが読み取れる。

コツェブーに対して非常に厳しい見方をしていたコウルリッジであるが、彼は若い時分にシラーの『群盗』に感動したエピソードが知られており、それが影響して後の『オソーリオ』(*Osorio* 1873) 執筆へとつながる。コウルリッジは当時のドイツ文学に一定の評価を与え、『叙情民謡集』の序文が書かれる直前もシラーの史劇『ヴァレンシュタイン』(*Wallenstein* 1798-99) を翻訳している。1799年12月に『ヴァレンシュタイン』の翻訳を始め、完成したのは1800年4月であった(高山 213)。ワーズワスも完成後すぐにこれを読んでいたことが知られている(Wu, *Wordsworth's Reading* 182)。だが、コウルリッジの評価するシラーに対してコツェブーの作品が大衆を呼び寄せ、定期刊行物においても評価が与えられる状況は、彼にとって実に不愉快だったと思われる。

また、ワーズワスはコウルリッジ訳『ヴァレンシュタイン』を読んだ上で1800年9月に『叙情民謡集』の序文を書くが、ワーズワスのコッェブーに対する批判的意識はコウルリッジと共有するところも多かったと思われる。ワーズワス自身によるコッェブーへの具体的言及は極めて少ないが、コッェブー作品の翻訳の他、ゴシック小説『マンク』(*The Monk* 1796)の著者として有名になったマシュー・グレゴリー・ルイス(Matthew Gregory Lewis)のゴシック演劇『古城の亡霊』(*The Castle Spectre* 1797年上演、1798年出版)について、1798年3月6日付の書簡に記述が見られる。

Mr. Lewis's success would have thrown me into despair. The Castle Spectre is a Spectre indeed. Clothed with the flesh and blood of £400 received from the treasury of the theatre it may in the eyes of the author and his friend appear very lovely. (187-88)

ワーズワスはゴシック小説を「狂った小説」と表現して批判していたが、そのゴシック的主題は演劇にも盛んに取り入れられていた。しかも、このゴシック演劇の作者がコッェブーの悲劇の翻訳もするという点で繋がりがあり、ワーズワスが批判的にしたのも理解しやすい。ドイツの悲劇がゴシック小説と並べられていたのも、両者共に多くの読者や観客の感情を煽って人気を博す点において共通項がある。このようなワーズワスのコッェブーやゴシックに対する激しい批判と嫌悪は、コウルリッジが示している見解と近いところにあったのではないかと推測される。

### 3. 『ペルーのスペイン人』

ワーズワスやコウルリッジに非難されたコッェブーの悲劇であったが、彼の作品は実際にはどのようなものだったのか。ワットやゲイマーの議論は当時のイギリスにおけるドイツのイメージなど、社会的、文化的状況を把握する上では非常に参考になるのだが、コッェブーの作品の中身に立ち入った議論は少ないので、ここではコッェブーの作品を具体的に検証する。ただし、悲劇のみならず喜劇も書いていたコッェブーの



全体的な作品論を展開する余裕はここにはないので、この節ではイギリスで特に人気を博した悲劇の一つを取り上げる。<sup>1</sup>

数あるコツェブーの英訳作品の中でも特に人気があったのは『ペルーのスペイン人、或いはロラの死』(*Die Spanier in Peru, oder Rolla's Tod* 1796)である。この作品はリチャード・ブリンズリー・シェリダン(Richard Brinsley Sheridan)や先述したルイスなど、様々な訳者による翻訳、或いは翻案が出版された。各翻訳によって場(scene)の分け方が異なっていたり、歌の部分の有無、結末の付け方、新たにプロローグやエピローグが加えられているものがあったりなど、様々な違いがある。

内容は16世紀スペインの「征服者たち」、いわゆるコンキスタドールス(Conquistadores)の一人であるピサロ(Pizarro)がインカ帝国征服を目論見、ペルー人と戦うものである。とはいえ、題名にも現れている通り、将軍ピサロを英雄的に描くのではなく、むしろ残虐非道なスペイン人の所業に対し、素朴で信義の厚いペルー人が犠牲になる悲劇性が強調されている。特に、ペルー軍の将軍ロラ(Rolla)は英雄的な死を遂げる。

インカ帝国を舞台に据えているところには、オリエンタル世界への興味と憧れが垣間見える。ゴシック的な文脈ではウィリアム・ベックフォード(William Beckford)が既に『ヴァテック』(*Vathek* 1786)でアラビア世界を舞台に幻想的な世界を描いているが、『ヴァテック』のような作品では未知なる故に神秘的な国であるアッパース朝のカリフ、ヴァテックが悪魔的に描かれている。それとは対照的に『ペルーのスペイン人』は、非ヨーロッパ的なものを不気味なもの、悪魔的なものとして表象するのではなく、むしろスペインの傲慢な帝国主義を批判的に見ながら、素朴な人間の篤実な精神の気高さを説いていて興味深い。

二つの文明の特徴が対照的に見られる例として、以下に第3幕第2場の一部を引用する。元々スペイン人であったアロンゾ(Alonzo)は現地の女性コラ(Cora)と結婚してペルー軍の将軍となるのだが、ピサロ側にとって反逆者である彼が囚われた時、コラは夫を助けに行こうとする。それを国王アタリバ(Ataliba、恐らくインカ帝国最後の皇帝アタワルパを指していると思われる)は以下の引用のように説得して止める。

翻訳はアン・プランプトリ (Ann Plumptre)<sup>2</sup> の *The Spaniards in Peru; or, the Death of Rolla* (1799) に基づく。

Do not forget the mother in the wife. Would you intrust your infant to strange hands, or take him with you, to become a prey to the barbarous Spaniards? Think, also, what would be the fate of your charms among such monsters? (42)

純朴なペルー人に比してスペイン人は「野蛮な」「怪物」として描かれている。残虐なピサロ一味はこの作品において悪役であり、彼らと戦って最終的に敗れざるを得なかったペルー人こそがこの作品の主役であって、同情をもって描かれている。また、スペイン人にしてペルーの將軍となったアロンゾには、スペインとペルー双方の間の中間的要素が付与され、両国の単純な二項対立を崩す存在である。

また、彼らに対して援助の手を差し伸べるドミニコ会修道士ラス・カサス (Las-Casas) の存在も重要である。インディオに対するスペインの所業を非難したラス・カサスは歴史的にも重要な人物であるが、そのラス・カサスがピサロと直に対立意見を進言する人物としてこの劇には登場する。宗教者としての慈愛の眼差しを持った彼の見解が、支配欲や名誉欲まみれの軍人ピサロと衝突する光景も見所であったと思われる。

このように、スペイン人といっても一概に悪魔的に描かれているわけではなく、様々な立場の人物が交錯している。その中で、一番強い権力行使するピサロとその一味が残酷な悪役として登場し、批判の中心はインカ帝国に対して行った彼らの非道、そして彼に代表されるスペインの破壊的、植民地主義的な政治の問題である。

さらに、この作品が当時の観客に喜ばれた背景を歴史的に探れば、もちろんドイツ、或いはイギリスから見たスペインに対する政治的な立場の問題も関係しているだろう。1714年にジョージ1世が英国王に即位して以来、イギリス王室はドイツ系のハノーヴァー朝が続いていた。そのため、ドイツに対する一定程度の親近感と、それとは逆にフランス革命以降のカトリック国家に対する感情の悪化とが対照的に存在してい

た。しかも、これがスペインの歴史と関係した劇作品ともなれば、ピサロの一世代後には英西戦争が起こっており、カトリックの盟主たるスペイン国王フェリペ2世とエリザベス1世との激しい対立や、有名なアルマダの海戦も想起され得る。『ペルーのスペイン人』にはイギリス人の登場人物はいないが、上演当時のイギリス国民における反カトリック的感情を刺激したり、16世紀以来のスペインに対する因縁の歴史観を煽る要素があり、一時シェイクスピア作品よりも上演回数が多くなったのも、相応の歴史的理由が背景にあったためと考えられる。

ただし、既に考察したように、イギリスとスペインの立場を単純な二項対立にしてこの作品に重ねることはできない。同じスペイン人であっても、ピサロのインカ帝国征服に異を唱える人物たちがペルー側に立って戦を交え、残酷な植民地主義の犠牲になる者達を描くのが『ペルーのスペイン人』である。そして、ピサロの考えを押し留めようとする人物の一人が他ならぬカトリックの司祭であったラス・カサスなのである。

ペルーに対するスペイン人の立場は一枚岩ではなく、スペインの内部にもまた対立項が存在している。いずれにしても、単純なヨーロッパ優越主義ではなく、むしろポストコロニアル的とも言える視点が混じっており、この問題をドイツ人作家コツェブーが描き、それが英訳されてイギリスの観客に受けたという事実には政治的立場が幾重にも屈折している。このような屈折を重ね合わせつつも、当時のイギリスの大衆の多くがコツェブーの示した反ピサロ的演劇を積極的に受容した事実は特筆に値し、『ペルーのスペイン人』の重要性を示すものである。

とはいえ、ワーズワスやコウルリッジが主張したように、この作品が極端に観客の感受性を煽ることで人気を得ていた側面も看過できない。

たとえば、歴史的な事件を題材に取る劇作品では戦闘場面が何らかの形で描かれることが多いが、戦闘そのものは舞台上で行わず、その結果に従者が事後的に報告する場合が多い。しかし『ペルーのスペイン人』では、ペルー人少年が離れたところで木に登り、戦闘場面を盲目の老人と国王アタリバに実況中継する形で描かれる。その様子はさながらスポーツ試合のアナウンサーのように臨場感を伴って伝えられ、興奮する人々の様子が示される。このような同時進行的な戦闘場面の伝達は、当

時の観客の興奮を煽ることにもなったのではないかと想像させる。

他にも、ピサロの部下がペルー人を舞台上で刺し殺す場面、囚われた夫アロンゾを救うために戦場に赴くことも厭わないと激しく訴えるコラの姿など、劇は情緒的に展開する。結末の場面はその最たる例で、血を流したロラがアロンゾとコラの子供を救い出して登場し、息絶えるのだが、その臨終の言葉は“I die for Cora” (93) である。コラへの愛を示して死ぬ彼の姿は極めて印象的だ。ロラはアロンゾの友人であり、厚い友情を結んでいる。しかし同時にその妻コラに思いを寄せ、一種の三角関係が存在している。夫婦の関係も友情も破壊することなく自らの情熱を抑制していたロラが、最期にコラの名前を発することで、ピサロとペルー人との対立という政治的問題とは別次元の、極めて情緒的な男女間の問題が同時に提示される。流血も伴いつつ二つの大きな主題が衝撃的な形で舞台の最後に示されて幕切れとなり、観客には大きな余韻が残る。

## 結 論

ワーズワスは 1840 年になって、書簡の中で以下のように述べている。

What we want is not books to catch purchasers, Readers not worth a moment's notice, not light but solid matter, not things treated in a broad and coarse, or at best a superficial way, but profound or refined works comprehensive of human interests through time as well as space. Kotzebue was acted and read at once from Cadiz to Moscow; what is become of him now? (1010)

観客の感情を激しく刺激し、ヨーロッパ中にその名を轟かしたコツェブーがこの時にはかなり人気が落ちてしまったようである。彼に強い拒否反応を示し、厳しく批判していたワーズワスにとってみれば、この状況は自分の慧眼の勝利と見えていたのではないだろうか。ワーズワスが目指していたのは一時的な人気を獲得する浅薄な作品ではなく、時空を超えて普遍的に人間の興味を惹きつける深く洗練された作品である。上記書簡が書かれた時点で既にコツェブーの名が消え始め、後の文学史で

淘汰されかける状況を思えば、彼の批判にはある程度妥当性を認めることができる。シラーより自然、ゲーテより感覚に訴えると評価されることもあったが、現代にまで至る普遍性を持っているとは言い難い。

しかし、コツェブーを読まない限りはワーズワスやコウルリッジの批判の対象は分らない。ワーズワスにとってゴシック小説と並んで愚かしいもの、コウルリッジにとって過剰に感情を刺激するものとして見られたものは何だったのか、彼らの文学的理念は何と対立していたのか、これらを明らかにするためにはコツェブーの詳細な研究が必要である。

また、コツェブーの演劇には人々を熱狂させた激しい情念の描写や歴史性、イギリスにおけるドイツ文学の受容と影響の問題など、追究すべき問題が豊富に含まれており、今後さらなる研究の進化を必要とする。本論はそのための一石を投じることを目指している。

\* 本稿は2013年10月20日、安田女子大学において行われたイギリス・ロマン派学会第39回全国大会において口頭発表した「イギリス・ロマン主義における“German Tragedies”の翻訳」を改稿したものである。

### Notes

<sup>1</sup> 当時の英文学におけるコツェブーの喜劇の影響を示す一例がオースティン (Jane Austen) の『マンスフィールドパーク』 (*Mansfield Park* 1814) である。この中の素人芝居のエピソードで登場する『恋人たちの誓い』 (*Lovers' Vows* 1798) はコツェブーの『私生児』 (*Das Kind der Liebe* 1791) をインチボールド夫人 (Elizabeth Inchbald) が翻訳したものである。

<sup>2</sup> *Oxford DNB* によれば、アン・ブランプトリ (1760-1818) はノリッジに生まれ、ケンブリッジ大学クイーンズコレッジの学寮長ロバート・ブランプトリ (Robert Plumptre) の次女であった。充実した語学教育を受け、コツェブーの翻訳の他、作家としても活躍し、アミーリア・オーピー (Amelia Opie) やヘレン・マライア・ウィリアムズ (Helen Maria Williams) との交流もあった。

### Works Cited

- Rev. of *Adelaide of Wulfingen*, by Augustus von Kotzebue, translated by Benjamin Thompson in *Critical Review*. 25 (January 1799): 31-37. Print.
- Coleridge, Samuel Taylor. *The Collected Works of Samuel Taylor Coleridge*. Vol. 7. *Biographia Literaria*. 2. Eds. James Engell and W. Jackson Bate. London: Routledge and Kegan Paul; Princeton: Princeton UP, 1983. Print.
- . *The Collected Works of Samuel Taylor Coleridge*. Vol. 5. *Lectures 1808-1819 On Literature*. 1. Ed. R. A. Foakes. London: Routledge and Kegan Paul; Princeton: Princeton UP, 1987. Print.
- Gamer, Michael. *Romanticism and the Gothic: Genre, Reception, and Canon Formation*. Cambridge: Cambridge UP, 2000. Print.
- Hogle, Jerrold E. ed. *The Cambridge Companion to Gothic Fiction*. Cambridge: Cambridge UP, 2002. 2008. Print.
- Kotzebue, Augustus von. *The Spaniards in Peru; or, the Death of Rolla*. Trans. Anne Plumptre. London: R. Phillips, 1799. Print.
- Railo, Eino. *The Haunted Castle: A Study of the Elements of English Romanticism*. 1927. New York: Gordon, 1974. Print.
- Shaffer, Elinor. "Plumptre, Anne (1760-1818)", *Oxford Dictionary of National Biography*. Oxford UP, 2004; online edn, 2010. Web. 14 Oct. 2011.
- Stockley, V. *German Literature as Known in England 1750-1830*. London: Routledge, 1929. Print.
- Summers, Montague. *The Gothic Quest: A History of the Gothic Novel*. 1938. New York: Russell and Russell, 1964. Print.
- Watt, James. *Contesting the Gothic: Fiction, Genre and Cultural Conflict, 1764-1832*. Cambridge: Cambridge UP, 1999. Print.
- Wordsworth, William. *The Early Letters of William and Dorothy Wordsworth (1787-1805)*. Ed. Ernest de Selincourt. Oxford: Clarendon P, 1935. Print.
- . *The Letters of William and Dorothy Wordsworth. The Later Years*. Vol. 2. Ed. Ernest de Selincourt. Oxford: Clarendon P, 1939. Print.
- . *Lyrical Ballads, and Other Poems, 1797-1800*. Eds. James Butler and Karen Green. Ithaca and London: Cornell UP, 1992. Print.
- Wu, Duncan, ed. *Romanticism: An Anthology*. Second ed. Oxford: Blackwell, 1998. Print.

イギリス・ロマン主義における“German Tragedies”の翻訳:コツェブーの『ペルーのスペイン人』

— . *Wordsworth's Reading 1800-1815*. Cambridge: Cambridge UP, 1995. Print.

石川實「ドイツ恐怖小説とゴシック小説」小池滋、志村正雄、富山太佳夫編

『城と眩暈：ゴシックを読む』ゴシック叢書 20、国書刊行会、1982。

亀井伸治『ドイツのゴシック小説』彩流社、2009。

高山信雄『コウルリッジとドイツ文学者』こびあん書房、1993。